

## 寸劇づくりを位置づけた自学の展開

### 1 本実践で育む「豊かな気づきや感じとり」

本校では、社会科で育みたい感性として、次の点をあげている。

- ① 社会的問題を解決する人間の営みにかかわる感性
  - ② 社会的問題の解決に見られる人間の知恵にかかわる感性
  - ③ 問題を自分なりに解決しようとする意志決定や社会参加に関する感性
- そして、これらは人間の営みを第三者としてとらえるのではなく、その立場に立って共感的にとらえ、考えていくなかでより深まっていくと考えている。

本実践で育みたい気づきや感じとりは上記の①②にかかわるものであり、このような点から本事例に即して育みたい気づきや感じとりをとらえ直すと次のようになる。

- 歴史的事象に見られる問題を解決しようとする人々の営みや知恵に関わる気づきや感じとり。
- 歴史上の人々の問題を解決しようとする営みや知恵に関して、第三者的なとえらではなく、その当時の人々の立場にたった多様な気づきや感じとり。

したがって、本実践で育みたい豊かな気づきや感じとりのできる子どもとは、以下のような子どもである。

歴史的事象に見られる問題を解決しようとする人々の営みや知恵に関して、その当時の人々の立場に立った多様な気づきや感じとりのできる子ども

### 2 「豊かな気づきや感じとり」を育む工夫

本実践では、児童がその当時の人々の立場に立った多様な気づきや感じとりができるようにしていくために、学習活動と単元展開に焦点をあてて次の工夫を行った。

寸劇づくりを単元の導入部に位置づけ、台詞の吟味を中心にした展開をはかる。

上記の工夫を行った意図は以下の通りである。

○ 台詞の吟味を中心とした寸劇づくりについて

- ・ 子どもたちは身体をつかった活動や遊技的活動を好む傾向があり，劇という前進をつかった表現活動を設定することにより，児童の認識を主体的なものすることができる。
- ・ 社会科の歴史劇の重要なことは，史実に基づいた劇づくりである。したがって，台詞の言い方や身体表現のうまさよりも整理そのものが史実に基づいたものであるかを吟味していくことが求められる。
- ・ 劇をつくる過程において，児童は，演技する人物や時代背景を様々な角度からとらえる必要性が生まれ，おのずと資料の読み取りが深くなっていく。また，同時に見いだした資料から人物を思い描いていくことが求められる。従って，自然な形で子どもたちの気づきや感じとりを培っていくことができる。
- ・ 史実に基づいた台詞であるかどうかを吟味していくためには，その人物に関わる資料を多様に収集し，多面的に解釈していくことが求められる。したがって，歴史事象を多面的にとらえていこうとする姿勢や能力を培っていくことができる。
- ・ 劇づくり（台詞づくり・身体表現）の過程で，事実をもとにした自分なりの心情や思考を織りまぜることができ，児童個々の気づきや感じ方を生かすことができる。また，その表現をとらえて個に応じた評価，支援を行っていくことができる。

○ 単元導入部に寸劇づくりを位置づけることについて

劇づくりを導入部に位置づけることによって，児童が，劇をつくるために自ら資料を収集し，自分の知り得た事実に基づいて劇をつくっていくことをねらっている。つまり，劇をつくることを目的として，児童が自力で学習していく展開である。児童の自力での調べ学習には不確かさもみられるが，劇を相互に吟味していく場を追究過程に位置づけることによって，不十分さを自ら修正をしていけると考えている。

劇づくりを目的とした自学の展開

過程	主な内容と活動	教師の支援
めあての把握	1 寸劇をつくるというめあてを持つ ・場面の把握 ・人物の把握	・寸劇をつくる場面の設定を検討する。 ・出会わせ方の工夫
めあて追究	2 寸劇を作るために調べることを考える。 ・人物や時代背景	・調べる内容の示唆 ・調べ方の助言
(自力解決)	3 当時の様子を自力で調べる。 4 調べたことをもとに寸劇を作る。 ・自分自身でつくる。	・時間的保障 ・試行錯誤の容認
↑↓ (吟味)	5 寸劇を互いに発表しあい台詞を吟味する。 ・史実にもとづく良い点 ・疑問を持つ点	・深化をうながす発問 ・補助資料の提示 ・認証や意味付け
↑↓ (自己修正)	6 吟味をもとに台詞を修正する。	
成果のまとめ	7 自己修正した寸劇の発表相互発表	

3 豊かな気づきや感じとりを育む授業の実践

—第6学年単元「聖武天皇と東大寺の大仏」—

(1) ねらい

- 東大寺の大仏を手がかりに、奈良に都がおかれた時代の政治や文化が天皇を中心にまとめられていったことを理解できるようにする。
- わが国の歴史や国民生活に対する基礎的資料を効果的に活用する能力を培う。

(2) 単元展開（7時間）

- 第一次 東大寺の大仏完成式の様子を劇化するめあてをもつ。 (1)  
・規模・完成式の様子・台詞をつくる人物の確認
- 第二次 東大寺の大仏を建立した頃の世の中を自力で調べる。調べたことをもとにしてグループごとに寸劇をつくる。 (3)  
・政治、社会の様子・大陸とのかかわり・農民や人々のくらし
- 第三次 グループごとに大仏完成式の様子を劇で表現し、台詞の吟味を通して史実の確認とその解釈について検討する。 (2)  
・貴族の台詞 ・僧侶の台詞 ・農民の台詞
- 第四次 書くグループで台詞の修正・加筆を行い、発表しあう。 (1)

### (3) 授業の実際

#### ① 大仏完成式での様子を劇化するめあてをもつ場

大仏完成式の様子を示す想像画を提示し、大仏の大きさと完成式での様子の2点からとらえさせた。

大きさについては、模造紙で作成した実物大の耳や目などの一部分を提示し、全体の大きさは、どのくらいか子どもなりに自由に想像した後に、実際の数字を提示し、大きさをとらえさせた。

完成式の状況については、命じた人、期間、働いた人々、参列者の様子などについて次の点を説明した。

- ・ 聖武天皇の命によって作られ、754年に完成式が行われたこと。
- ・ 約10年かかって作られ、当時の人口の約1/2の人々が働いたこと。
- ・ 完成式には、約1万人の僧侶と多くの貴族が参列したこと。
- ・ 多くの外国の人々も参列したこと。
- ・ 主な働き手は、農民であったが、ほとんど参列できず、わずかに遠くで見た人もいたこと。

児童が、大仏の大きさと参列者をとらえたところで、「完成式に参列している人々は、どんな気持ちで大仏をながめ手いたのだろうか。」と呼びかけてみた。児童が、自分なりの思いをそれぞれに出し合ったところで、「実際に当時の人々はどんな思いで大仏をながめていたのか簡単な劇であらわしてみよう」と呼びかけて寸劇づくりをめあてとした。ここでは、人物を僧侶、貴族、農民の三者に限定して行うことにした。

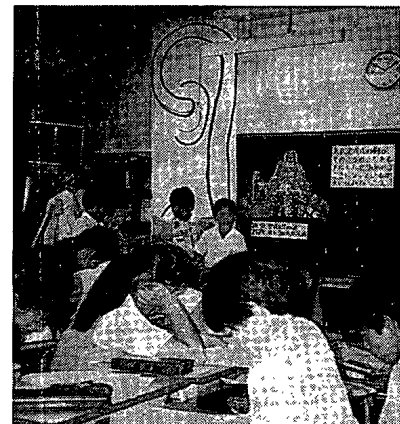
児童が寸劇づくりをおこなうというめあてをもったところで、「より確かな台詞にするためには、どんなことを調べておかなければならないか」を考えさせてみた。児童からだされた内容の主なものは次の通りである。

- ・ 建立の目的
- ・ 建立の経過
- ・ 当時の社会の様子
- ・ 農民や貴族の暮らし

社会科の劇においては、史実に基づくことが重要であり、その点で子どもたちが、完成式や人物の時代背景に目を向け始めていることは大切なことである。

#### ② 自力で世の中の様子を調べる場

子どもたちは、確かな台詞を作るために、自



力で調べ学習を行っていったが、ここでは、まず、教科書と資料集を中心資料とし、そこで不十分な場合に図書館等の資料を活用することを約束した。それは、事実をとらえる学習に混乱を生じさせないようにするためである。また、子ども自身ではとらえきれない内容については、補助資料として教師が作成したものを配付した。

③ 調べたことをもとに寸劇づくりをする場

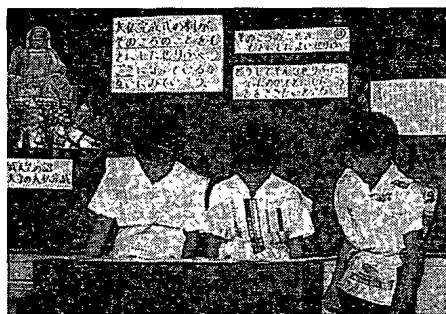
子どもたちが自力で当時の様子を調べたところで、グループごとに台詞を作る活動を行った。手順としては、まず自分自身で僧侶、貴族、農民、の台詞をつくり、次にグループで出し合って一つのものにしていく。その際、台詞を作るためのもとした資料や事実は明記し、根拠を明らかにすることを確認した。資料1)はその一例である。

④ 寸劇の台詞を吟味する場

台詞の吟味を次の手順で行っていった。

ア 発表の準備を行う。

各グループごとに台本の読み合わせを行う。その際、人物の様子をわかりやすくするために簡単な道具や服を新聞紙等で作成する。



イ 互いに発表し、吟味する。

ここでは、台詞が史実にもとづいたものであるか、史実から考えられる範囲の台詞であるかを吟味することが目的である。そこで、次の2つの発問を用意して吟味を行った。

- ・そのころのことをもとにしたよい台詞はどこか。
- ・なぜ、そのような台詞をつくったのか、自分たちの調べた事実と比べて疑問に思う台詞はどこか。

吟味するにあたって、劇表現を見聞きするだけでは、不十分であるため、発表前に各グループの台本を印刷しておき、発表を見聞きしながら上記の2つの点について、プリントに印をする作業を位置づけておこなった。

吟味では、よいと思ったところや疑問に思うところの指摘の後に、なぜそう思うのか自分たちの調べた事実を紹介させながら、史実にもとづいた台詞になっているかを確認させていった。

発表後、子どもたちの吟味の一例（資料1の班の場合）を示すと次のようになる。

疑問に思うところとしては、貴族の「わーはっはっは」という台詞への指摘があり、貧窮問答歌の解釈をめぐる議論となった。以下はそのやりとりの一部である。（資料2：貧窮問答歌についての議論）

A 1 「わーはっはっ」とはどういうことですか。

B 1 「貴族が農民たちにむかって嫌みでいっている台詞です。」

A 2 「嫌みでいったというけれど、貧窮問答歌には、貴族であった山上憶良が農民のことを思って歌った歌とあるから、貴族が農民のことを嫌みに思っているのは、おかしいのではないか」

\* この時点でA 2の意見に賛成の児童は、15人程で、天皇中心の世の中になりつつあるが、貴族が農民を苦しめているわけではないといった発言などが見られた。

その後、A 2に反論するものとして、

B 2 「山上憶良は、特別で一部であり、多くの貴族はちがう」

B 3 「もし、貴族みんなが農民のことを思っているのであれば、調べたような大仏づくりへ無理に連れていったり、税の取り立てなどをするのでなく、免除があるはずだ」

B 4 「たくさんの貴族が農民のこと思っているのなら、貧窮問答歌のような農民のことを考えた歌がたくさんあるはずだが、自分たちの調べた中では、一つしかない、だから、山上憶良は一部だと思う。」

このような意見がだされ、多くの児童は山上憶良のような貴族は、一部であると落ちついた。そして、農民のことを大切にしない貴族の台詞や逆に心配している台詞など両面が考えられるととらえていった。

よい台詞だと思ったところとしては、「国に残してきた家族のことを思うと身を切られる思いがして」などをあげて、当時の農民の事実にもとづいて考えられる表現であるというものが多かった。そして、その根拠として児童

は、税の内容や取り立ての様子、大仏を建立する年月やその農民の様子などをあげていた。

⑤ 寸劇の修正を行い発表しあう場

吟味したことをもとに修正し、同じ立場の人物であっても、様々な台詞が考えられること、同じ出来事でも立場によって台詞が異なることなどをとらえていった。紙幅の都合上内容は割愛する。

4 実践をおえて

寸劇づくりを導入に位置づけて台詞の吟味を行ったことが児童の気づきや感じ方を育む上で、どのような効果が見られたか、授業記録の中から探してみたい。ここでは、貴族の台詞を吟味するなかで議論の分かれた、貧窮問答歌の解釈の場面（資料2）を考察する。紙幅の都合上要点のみを示す。

○寸劇づくりを導入に位置づけて、台詞の吟味を行うことの効果

- ・ その当時の人物の立場に立った、様々な視点からの気づきや感じ方を引き出すことができ、歴史事象を多角的に見ていく力を培うことができる。
- ・ 台詞の吟味（＝史実の解釈）を行い、自分自身の気づきや考えを言い合う中で、より確かさを求めようとし、追究意欲が増幅される。
- ・ 歴史事象を多角的な視点でとらえていくために、一つの資料ではなく多様な歴史資料を収集したり、活用したりする能力が養われる。

○課題

- ・ 当時の様子をとらえる資料の収集量に個人差があったことと更にその解釈に違いがあり、同時に資料の確認と理解、さらに、解釈について検討していったため、焦点化して考えにくい面があった。
- ・ 改善案としては、史実を確認する場と解釈について検討する場を明確に分け、それぞれのねらいにそった時間的保証を十分に行う。  
子どもの資料の収集量が拡散し、考えにくいことのないように、劇化の場面を具体的で子どもの考えやすい場面に更に焦点化する。

